

「今後の大戸川治水に関する勉強会(第2回)」に対していただいたご意見・ご質問

No	ご意見・ご質問	滋賀県の回答
1	<p>7頁 平成27年9月関東・東北豪雨9時間降水量コンターズをそのまま大戸川流域に適応する妥当性について。(特に地形条件が違いすぎないでしょうか?)</p>	<p>全国各地でこれまでに経験したことの無い想定を超える雨が発生していることから、このような大きい雨についても検証することとしました。 全国の実績降雨を地形条件等が異なる大戸川流域にどのように設定するかについては、大戸川ダム流域に9時間雨量が最大となるように雨域を設定し、“大戸川ダムにとって最も厳しい条件”で計算しております。</p>
2	<p>9頁 検証条件には【HWL破堤】と【無破堤】と2条件をいれながら、10-11頁の「氾濫解析結果」には【HWL破堤】の4ケースしか図示がされておられません。13頁の検証結果のまとめのところには、【無破堤】の場合の浸水面積減少割合が数値で小さく示されていますが、わかりにくいです。わかりやすく対比させるために、【無破堤】の条件下での対応4ケースも図示していただくとありがたいです。(いかにもダム効果が大きい方だけを採用した、と勘繰られるようなデータの出し方は行政の仕事の仕方として公正とは言えません。)</p>	<p>【無破堤】条件の解析結果について、「解析結果【無破堤】」として掲載させていただきました。</p>
3	<p>9頁の大戸川ダムの操作方法は、穴あきダム(流水ダム)で調節装置をつけるのですか。どのようなダム形態を想定しているのでしょうか。大戸川ダム事務所の回答をお願いします。</p>	<p>国に確認したところ、「淀川水系河川整備計画に『大戸川ダムについては、利水の撤退等に伴い、洪水調節目的専用の流水型ダムとするが、ダム本体工事については、中・上流部の河川改修の進捗状況とその影響を検証しながら実施時期を検討する。また、これまで進捗してきた準備工事である県道大津信楽線の付替工事については、交通機能を確保できる必要最小限のルートとなるよう見直しを行うなど徹底的にコストを縮減した上で継続して実施する。』と記載しているとおり、県道大津信楽線の付替工事を進めており、現時点で詳細設計等は行っていないが、大戸川ダムは、高さ約67.5m、総貯水容量約22,100千m³、堆砂容量約200千m³の重力式コンクリートの流水型ダムとして計画しており、常用洪水吐に設けたゲートにより洪水調節を行う方針です。また、大戸川ダム建設事業の検証を行った際に、維持管理費用は年間約286百万円と見込んでおり、堆砂容量については、実績データを基に計画比流入土砂量、計画堆砂量の計算を行い、妥当性について点検を行っています。」と聞いております。</p>
4	<p>中川顧問が指摘しておられましたように、大戸川は土砂流出や土砂災害の多い地域条件があります。このような中で、ダム建設をした場合の土砂の堆積予測、土砂除けをふくめて維持管理の計画とその長期的管理費用について、ここも大戸川ダム事務所からの回答をご提示下さい。</p>	<p>国に確認したところ、「淀川水系河川整備計画に『大戸川ダムについては、利水の撤退等に伴い、洪水調節目的専用の流水型ダムとするが、ダム本体工事については、中・上流部の河川改修の進捗状況とその影響を検証しながら実施時期を検討する。また、これまで進捗してきた準備工事である県道大津信楽線の付替工事については、交通機能を確保できる必要最小限のルートとなるよう見直しを行うなど徹底的にコストを縮減した上で継続して実施する。』と記載しているとおり、県道大津信楽線の付替工事を進めており、現時点で詳細設計等は行っていないが、大戸川ダムは、高さ約67.5m、総貯水容量約22,100千m³、堆砂容量約200千m³の重力式コンクリートの流水型ダムとして計画しており、常用洪水吐に設けたゲートにより洪水調節を行う方針です。また、大戸川ダム建設事業の検証を行った際に、維持管理費用は年間約286百万円と見込んでおり、堆砂容量については、実績データを基に計画比流入土砂量、計画堆砂量の計算を行い、妥当性について点検を行っています。」と聞いております。</p>

5	<p>今回の氾濫解析結果で、特に平成27年の関東・東北豪雨【HWL破堤】ケースを見ると、「異常洪水時防災操作」を行うと、急激な浸水範囲の拡大、浸水位の上昇をまねくが、「避難時間の確保」ができるので効果的だ、という提示がありました。大戸川ダム計画時の昭和60年代から平成初期には(私自身、友人がこの地域におりましたので集落移転の経緯を耳にしておりました)、大鳥居から田上地域で、「大戸川ダムさえつくったら、いかなる大雨が降っても枕を高くして眠れる」と公言をして、避難などは想定されておりました。国は「ダムの実力以上の過大期待」と「ダム安全神話」をひろげてきたのではないのでしょうか。1000年住み続けてきた大鳥居の皆さんが「犠牲になってもいい」と決意をなさり、集落移転を実行してきた国は、今、大鳥居の皆さんにどのような説明をなさるのでしょうか。国の担当部局にお問い合わせをしていただき、国土交通省(河川局)の幹部からの回答をいただけましたら幸いです。</p>	<p>国に確認したところ、「国土交通省では、平成27年9月関東・東北豪雨を受け、河川管理者をはじめ行政や住民等の各主体が『施設の能力には限界があり、施設では防ぎきれない大洪水は必ず発生するもの』へと意識を改革し、社会全体で洪水氾濫に備える『水防災意識社会』の再構築に取り組んでおり、ハード対策とソフト対策を一体的に進めているところです。大戸川ダムに限らず、全ての防災施設の能力には限界があることも含め、丁寧な説明を重ねつつ、ハード対策を着実に進めるとともに、住民避難の支援等のソフト対策について市町村や住民の皆様とともに取り組んでまいります。」と聞いております。</p>
---	--	---